

アジア科学技術コミュニティ形成戦略：機動的国際交流事業

1. 提案事業概要

【事業名】	月の科学と資源利用 —— 「かぐや」による科学的成果と近未来月資源利用 ——
(英語名称)	International Symposium of Lunar Science and Human Usage of Lunar Resources --- Scientific Achievement from Kaguya and Future Planning of Lunar Materials ---
【提案者氏名、役職、機関・部署名】	長谷部信行、教授、早稲田大学理工学研究所
【事業形態】*	(1) 国際集会の開催 (2) 研究者の派遣・受入れ
【実施期間】†	2010年 9月 8日～ 2010年 9月 10日 (3日・ヶ月間)
【実施場所】†	早稲田大学理工学部西早稲田キャンパス
【参加国・地域】†	日本・韓国・中国・台湾・インド・アメリカ・フランス・ドイツ等 10ヶ国・地域
【事業概要】	<p>本シンポジウムは韓国との二か国間協力事業を基軸として、発展するアジア圏の月科学と今後の月利用に関してアジア地域における我が国主導のネットワーク形成に向けて、日本・韓国・中国・台湾・インド等のアジアを中心として欧米を含めた第一級の研究者や月探査推進者による国際集会である。月探査衛星「かぐや」をはじめとする各国の月探査の最新の月科学の成果、アポロ・ルナ・月隕石試料に関する研究成果、また今後の世界の無人月探査計画や更に有人の月探査計画などについて、アジア地域におけるネットワーク・オブ・エクセレンスの形成を目指すものである。</p> <p>本研究の代表者(長谷部)は、「かぐや」搭載ガンマ線分光計(KGRS)の責任者である。本シンポジウムはかぐやの研究者、及び月科学のスペシャリストや将来の月利用に向けての基礎開発に携わっている責任者や若手の研究者で構成し、参加者数はあまり大規模ではなく、効率よく議論がしやすい70～80名程度とする。海外招聘者数は全体で**名とし、アジアからの招聘が大部分で、欧米の研究者数は3—4名程度を予定している。特に、日韓両国間の協力事業において、韓国側の研究代表者 KIM 博士は KGRS の共同研究者の一人であり、かつ火星探査機 MARS ODYSSEY のガンマ線分光計の共同研究者でもある。韓国は独自の月探査衛星の検討と開発に力を注いでいるが、アジア圏のネットワーク形成の重要性を強調している。実績のある日本の月研究者群は、韓国を含めアジアの今後の月・惑星探査の発展に積極的に貢献できると考えている。更に、中国・インドの月探査への積極性には目を見張るものがあり、特に月利用に向けたシナリオを明確に打ち出している。</p> <p>本シンポジウム開催の時期については、現在日本は大規模な月探査かぐやの成功で世界をリードしており、世界各国が「かぐや」の優れた月データに注目している状況のなかで大変有利な状況にある。そこで、KGRS の観測終了の翌年の2010年9月が適当であると考えている。この優位性は「我が国主導の研究ネットワークの形成」を助けるだけでなく、「アジア地域におけるネットワーク・オブ・エクセレンスの形成」に大いに役立つものと確信している。また、本シンポジウムを韓国との二か国間協力事業の共催を行うことにより、アジアネットワークに強い関心を有する韓国とその他のアジア諸国、くアメリカやフランスといった多数の国の共同研究者の注目を集めることができるものと期待できる。「月のサイエンス」と今後の「月開発・月資源の利用」は切り離すことのできない重要なつながりがある。本シンポジウムの開催により、国際協力が不可欠な月科学の発展と将来の月資源利用に大きく貢献することができ、他国との研究ネットワークのつながりをより強固にしていくことができると考える。</p> <p>2010年度は理工学研究所創設70周年である。学内で記念シンポジウムの開催が呼ばれている中で、本シンポジウムはその開催成果を一層促進することができる。研究所創設70周年シンポジウムと日韓共同事業との共催により、それらの事業費でシンポジウムの開催費の一部(主に国内研究者の旅費)を賄う予定である。海外(アジアを中心に)からの多くの月探査のスペシャリストを招聘、また開催後のプロシーディングの印刷等の費用は、この機動的国際交流事業の支援が不可欠である。</p>